

■(宝篋院)足利義詮

あしかがよしあきら
・ ・ ・ ・ ・ 1330 =

室町幕府2代将軍。戦乱の内にあったが晩年には小康をもたらし、幕政安定の基礎を固めた功績大。

生。父は尊氏、母は北条久時女登子。2人の兄があったが正室の子として嫡子となるのち鎌倉大納言、また京都三条坊門第に住んだため坊門殿とよばれた。

鎌倉幕府滅亡1333 = 3歳 : 隠岐を脱出した後醍醐天皇の軍を討つため尊氏が鎌倉を発つ際、母とともに人質の意味で鎌倉に置かれたという(「太平記」)。しかし尊氏か丹波で討幕の兵をあげると間もなく鎌倉大蔵谷の屋敷を脱出、新田義貞が挙兵すると家臣につれられてこれに参加、幕府滅亡後に足利勢と新田勢が対立したが、武士たちは多く幼児の義詮に従い、義貞は京都に向かう。

中先代の乱・1335 = 5歳 : 従五位下。

南北朝分裂・1336 = 6歳 :

後醍醐天皇没1339 = **9歳** :

五山制定・ ・ 1342 = 12歳 : 正五位下, 左馬頭

・ ・ ・ ・ ・ 1348 = **18歳** :

足利義詮入京1349 = 19歳 : 上洛まで主に鎌倉に留まっている。関東を重視した父の命により、嫡子として東国武士結集の役割を果たしたのであろう。***直義と高師直の対立が激化すると、鎌倉に弟基氏をおいて上洛、叔父直義に代って政務を統轄する。以後動乱の中で幾度か追われるが、**

観応の擾乱始1350 = 20歳 : 参議・左近中将。

・ ・ ・ ・ ・ 1351 = 21歳 : 観応の擾乱による尊氏の関東下向にも従わず、京都で政務をみる。

観応の擾乱終1352 = 22歳 : 南朝との講和は破れて京都を追われるが、後光厳天皇の擁立を実現する。

以後も南朝・旧直義党との曲折が多く、2度の京都没落を経験するが、

・ ・ ・ ・ ・ 1357 = **27歳** :

足利尊氏死・1358 = 28歳 : ***尊氏が死亡すると征夷大将軍となり、細川清氏を執事に任じた。尊氏死後の武将たちの動揺を、南朝方に打撃を与えることで乗切ろうと、**

・ ・ ・ ・ ・ 1359 = 29歳 : 尊氏が注文し、賢俊がプロデュースした大作絵巻「泰衡征伐絵」が完成、御用絵師土佐派の登場となる。畠山国清の関東勢合せた大軍を率いて河内に出陣、楠木正儀の赤坂城を落し、南朝方に大打撃与えるも、

・ ・ ・ ・ ・ 1360 = 30歳 : 国清・清氏らが討とうとした仁木義長によって御所に取籠められるが、佐々木道誉の勧めで、ひそかに脱出、義長は南朝に下り、国清は関東に帰る。執事清氏が訴訟親裁権を犯した上、宿老道誉と対立したため、

・ ・ ・ ・ ・ 1361 = 31歳 : 清氏追討命を下すと、清氏は南朝に降り、楠木勢と呼応して京都に迫ったため、後光厳天皇を奉じて再び近江に下るが、間もなく京都を回復、**南朝方の最後の京都占領は終わらせ、**

・ ・ ・ ・ ・ 1362 = 32歳 : 権大納言。四国に走った清氏が従兄弟の細川頼之に討たれると、足利一門中將軍家につぐ高い家柄をもち、清氏と対立していた旧直義党の斯波高経に幕政の補佐を要請、高経は13歳の四男義将を執事として後見し、幕府政治を整える。他方、関東の基氏と対立関係にあったが、

山名時氏征討1363 = 33歳 : 関東でも旧直義党の上杉憲顕を招いて関東管領の任務を委ね、その子憲春を関東執事とし、基氏との関係を修復。南朝方の大内弘世や、直冬党の山名時氏も幕府に復帰し、***幕府体制をほぼ安定させるが、**この間、四辻善成に命じて、源氏物語の注釈書「河海抄」を編ませる。

・ ・ ・ ・ ・ 1366 = **36歳** :

細川頼之管領1367 = 37歳 : 興福寺の所領問題による讞訴と佐々木道誉らの反発によって高経・義将は越前に没落するが、かねて制作させていた絵巻「地藏験記絵」が完成。高経は病死し、義将は降伏。次期將軍の地位をねらっていた弟基氏も死去。***病に倒れ、家督を幼少の義満に譲り、細川頼之を管領に迎えて補佐させ、没した。**和歌をよくし、「宝篋院殿御百首」や「新続古今和歌集」などの勅撰集に収められたものも少なくない。